

中国語訳「和合本」新約聖書(1907)について ：ギリシャ語底本の問題

加藤, 昌弘

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

115

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

101

(発行年 / Year)

2001-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004822>

中国語訳「和合本」新約聖書（1907）について

——ギリシャ語底本の問題——

加藤昌弘

日本のキリスト教用語と中国語聖書

私たちが用いている日本語の聖書あるいはキリスト教用語は中国語訳聖書の影響を強く受けている。とりわけて Bridgman（裨治文）と Culbertson（克陞存）の訳による『新約全書』はヘボンやブラウンの翻訳事業に欠かすことのできない参考資料であった。この『新約全書』は日本人用に訓点がほどこされ、米国聖書会社によって何度も版を重ねて出版された。私の手もとにあるものには

耶穌降生千八百八十三年 米国聖書会社

新約全書

明治十六年 日本横浜印行

とある。明治十六年にはすでに日本語訳が完成していたが、それでも訓点本の需要があったのである。明治、というよりも戦前の人々の漢学の素養を感じさせる。

しかし、もともと 1859 年の時点で中国語に翻訳されたこれらの言葉、それは日本語に取り入れられ今日まで残ったが、現代中国語訳では通常はほとんど用いられていない。現代中国の聖書やキリスト教用語はある時期から大きく変わったのである。そしてそれが「漢学の素養」ではカバーできなくなった時、中国語聖書、あるいは中国のキリスト教は日本人の思考の外に追いやられてしまった。しかし新しい聖書の訳語やキリスト教用語は中国そして海外の華人社会に広く普及し、深く定着していったのである。

(漢訳聖書)	(現代中国語)
ブリッヂマン訳	和合本
(明治16年横浜刊行本)	(1907年)
耶蘇	耶蘇
神	神, 上帝
聖霊	聖霊
預言者	先知
異邦人	外邦人
諸信者	信的人
祈禱	祷告
奥義	奥秘
栄光	栄耀
副業	産業
施洗礼	施洗
受洗礼	受洗
肉之欲	肉体的情欲
迫害	逼迫
黙示	啓示
神之子	上帝的兒子
聖書	聖經
地之塩	世上的塩
世之光	世上的光
旨	旨意
偽善者	假冒為善的人
密室	内屋
誘惑	引誘
誠	戒命

左がブリッヂマン訳の日本語になった言葉, 右が現代中国語である。

現代中国語に「和合本」とあるが, この「和合本」と呼ばれる聖書こそ現代中国を代表する聖書であり, これらの言葉を中国の教会に定着させたのである。以上の訳語は新約の「マタイによる福音書」と「ガラテヤ人への手紙」から思いつくままに選んだものだが, これからの中国との関係の中で私たちは人間の

問題を深い所から語り合う時代に来ている。そしてその時「聖書」が問題にされるのなら、私たちは現代中国語のこれらの言葉をひととおりは理解しておかなければなるまい。

この小論は現在各地の中国人教会で用いられているこの「和合本」新約聖書について述べたものである。「中国語の聖書」、あるいはそれだけである人々の興味の対象になるかもしれないが、私はこの聖書へのアプローチのしかたを慎重に考えなければならなかった。私はこの小論をこの新約聖書のギリシャ語の底本からしるすことにした。中国語の聖書についてギリシャ語の底本からのべたりしても面白くも何ともないし、そのようなことを知りたいわけではない。もしそのように感じる人がいるなら、そのような感じ方を育ててきた中国への接近の在り方に一つの大きな疑問符をつきつけるべきであろう。

第1章

「和合本」底本の価値

この中国語口語訳新約聖書が出版されたのは1907年、光緒32年である。その12年後の1919年に旧約の口語訳が完成してから今日に至るまで、プロテスタント教会で中国語聖書といえば一般的にはこの「和合本」口語訳のことを指している。ここで対象とするのもこの口語訳の新約である。

この聖書が「和合本」と呼ばれるのは宣教師たちの名付けた“Chinese Union Version”の訳語であろうが、その初版の装丁がまるで一羽の蝶が羽を合わせたようであったので「胡蝶本」とも呼ばれたという言い伝えがある。「胡蝶訂」とは洋書風の装丁という意味であった。それがまだ珍しかった時代のことである。

1907年に出版されてから今日に至るまで、他の訳にとってかわられることのなかったその息の長さには二つの理由が考えられる。一つは訳文のよさであり、一つは底本の確かさである。訳文のよさについてはここでは最後に簡単にとりあげるだけだが、底本の確かさについては「中国語訳聖書の大きな転換点」としてこの「和合本」が今日高く評価されている一つの大きな理由としても注意しておかなければならない。

「和合本」の翻訳者たちが基準にしたのは1881年に出版された英文の「改訂訳 (Revised Version)」であり、そこにはウエストコット＝ホルト

(Westcott=Hort) のギリシャ語本文に対する考え方が反映されている。それは 19 世紀中葉の重大事件であるティッシュENDORF (Tischendorf) のシナイ写本 (N) 発見後の本文研究の成果が盛られている。「和合本」には 20 世紀の聖書研究にもじゅうぶんに耐え得るだけの中国語訳が提供されているのである。

この聖書の翻訳が決議される前年、北京の紫禁城では西太后が光緒帝に「親政」をゆだね、数年間は張之洞らの洋務運動が具体的な進展を見た。芦漢鉄道工事が起こされ、上海機器織布局が創業し、上海の民間の商人たちも「燮昌火柴 (マッチ) 公司」を設立した。翌 1891 年光緒 17 年はキリスト教会にとって暗い年であった。蕪湖教案、武穴教案、宜昌教案とあいつぐ「教案」が起こっている。翻訳途上の 1900 年には有名な義和団事件が起こった。そのような情勢からプロテスタントの歴史を見るということに私たちは慣れているが、ここではただ聖書の翻訳ということだけに話題を集中させることにする。

聖書の翻訳にたずさわったのは当時中国にいた宣教師たちであったが、彼らは世界の聖書翻訳史上画期的な一步をふみ出したのである。それは日本より 20 年も早い。ここでは中国というよりも世界が問題になってくる。「和合本」翻訳という事業はギリシャ語新約聖書の本文学史の中に位置づけて見るときより一層その意義を増してくるのである。

第 2 回宣教師大会 = 第 1 日

この新しい中国語聖書「和合本」の翻訳が決議されたのは 1890 年、光緒 16 年 5 月に上海で開かれた第 2 回宣教師大会 (General Conference of the Protestant Mission of China) でのことであった。この大会で各教派共通の口語訳聖書の必要がうたえられた。

中国のプロテスタントの歴史は 1807 年のロバート・モリソン (Robert Morrison) の広東上陸に始まるとされる。はじめ宣教師のほとんどはインド、マラッカ、バダヴィアなどに散在し別個に聖書の中国語訳に従事せざるを得なかった。モリソン訳、マーシュマン訳、ギュツラフ訳等が有名である。

1843 年、南京条約によって開港地の居住が許されると宣教師たちは香港に集まって各教派共通の聖書の翻訳を決議した。メドハースト (Walter Henry Medhurst)、ブリッジマン (Elijah Colemann Bridgeman) を中心にして 1853 年に完成した聖書は「代表訳 Delegates Version」と呼ばれる。しかし、

この翻訳は意見の相違から改訳、あるいは全く別の翻訳を生み出すことになった。

まず完成ま近の1851年にこの翻訳の中心的役割を果たして来た倫敦会 London Missionary Society のメドハーストが脱退し、独自の口語訳を作った。次にアメリカンボード ABCFM のブリッジマンが退出し、カルバートン (M. S. Culbertson) とともに全面的な改訳を行い1859年に^{アメリカ}美国聖書公会から出版された。さらにバプティストのゴダード (J. Goddard) も「代表訳」「ブリッジマン訳」に満足できずに独自の翻訳を出版した。これらは上海での出来事だが、北京ではジョセフ・エドキンス (Joseph Edkins), ウイリアム・マーティン (W. A. P. Martin), ジョン・バードン (John S. Burdon), ヘンリー・ブローデット (Henry Blodgett) 等による北京官話による新約 (1866年), シェレシェウスキー (S. L. Shereschewsky) による同じく北京官話による旧約 (1874年) が出版され、それらを一冊にまとめた旧新約聖書が1878年に出版された。

1890年の宣教師大会で各教派共通の聖書の必要がうたえられたのには「代表訳」後に倫敦教会、アメリカンボード、バプティスト、北京の学者グループによってそれぞれの翻訳が生みだされ、けっきょくまた不統一になってしまったことがある。この大会では北京での翻訳が高く評価され、その翻訳者たちがまず前面に押し出された。しかし「和合本」が生み出される背景にはもう一つの大きな、より重大な要因があった。この大会では聖書の翻訳者たちの他にもう一人、あまりにも有名な人物が登場してくる。

1807年にゼロから始まったプロテスタントの宣教は、1890年には男女宣教師が1,300名、信徒数5万に達していた。13年前、同じく上海で開かれた第1回宣教師大会ではまずオックスフォード大学の中国文学教授・ジェームス・レッジ (James Legge) の「儒教とキリスト教の関係」という原稿が読み上げられ、全体に学術討論会という性格が強かった。しかしそれから13年後の1890年5月7日から13日間、上海ライシェム劇場で開かれたこの第2回大会は最初から会場の空気が違っていた。498名が参加し、大会はまず北京から来たヘンリー・ブローデットの祈祷で始まった。ウィリアム・マーティン、ジョセフ・エドキンスらとともに北京で新約の口語訳を完成させた人物であり、この時にはもう「長老」と呼ばれている。さらに同じく北京で旧約の翻訳を完成させた

シェレシエウスキーが聖書翻訳についての報告を用意してひかえていた。さらに彼らの訳業を「翻訳史上最も心のこもった注意深い訳本である」と称賛してやまないカルヴィン・マティーア (Calvin Wilson Mateer) が今回の翻訳の責任者として推されようとしていた。

聖書翻訳者「長老」ブローヂットの祈祷につづいて一人の人物が講壇に立った。60 ま近の、もみあげからあごにかけて白い髭をたたえ、落ち着いた目をした老人だった。内地会 (China inland mission) の創立者・ハドソン・テラー (James Hudson Taylor) である。当時、湖南省や新疆を除いてほとんど中国全土に内地会の伝道拠点があり、ハドソン・テラー自身は '88 年 '89 年と欧米諸国をまわって募金をうったえつづけ、この年上海の本部に帰ったばかりであった。ハドソン・テラーといえは国家や教会に頼らず、募金者の名を残すこともせず、信仰のみでここまでの事業をなしとげた偉人として半ば伝説化されていた。この時講壇に立ったハドソン・テラーは、「少なくとも 1,000 名の新宣教師を中国に活動せしめることをこの会議において議決していただきたい。」と力説した。この要求を議決するかどうかがこの大会の大きなテーマとなり、新聖書翻訳はこの宣教のビジョンの中でとらえられざるを得なかった。

第 2 回宣教師大会=第 2 日

翌日はシェレシエウスキーの聖書翻訳についての講演で始まった。シェレシエウスキーはロシア籍のユダヤ人でヘブル語に精通しており、1874 年に北京官話の旧約を翻訳している。後に彼はその旧約を全面的に改訂しなおしたがその時にはもう手がきかなくなり、かろうじて二本の指でペンを動かせるだけだったという。彼の旧約の校訂版は「二指版」と呼ばれている。上海聖約翰^{セント・ジョンズ}大学の創立者である。

シェレシエウスキーの講演の後、大会は即座に聖書翻訳委員会の結成に動き出した。口語新約部門ではマティーアが責任者に推された。マティーアは大学卒業後、神学校に入り牧師をつとめた後にアメリカ長老会から派遣され、山東の登州で教育に従事し、登州文会館を設立した。1877 年からはジョン・アレン・ヤング (John Allen Young) らとともに教育活動の組織化につとめており、後の中華基督教教育協会の基礎を作った。彼は第 1 回宣教師大会の時には「キリスト教教育と儒教」という講演をし、討論にもち込んだことがある。こ

のマティーアは聖書翻訳史上最もすぐれた訳業としてヘンリー・ブローヂットやシェレシェウスキーの北京官話訳を称賛していたのである。

翻訳は旧約新約ともに「文理 (wenli)」「浅文理 (easy-wenli)」の二つの文語体と「国語 (kuoyü)」つまり口語体の三種の文体に分け、それぞれ委員会を作って行われた。そのうち新約の「国語 (口語)」訳委員に選ばれたのは、マティーアを筆頭に

ゴッドリッチ (C. Godrich)

オウエン (G. Sydney Owen)

バーラー (F. W. Baller)

スペンサー・ルイス (Spencer Lewis)

たちであった。

翻訳委員の選出と同時に、翻訳方法をめぐって二つの重要な発表が行われた。

一つはライトによる「英国聖書協会の事業に関する報告」

一つはドクトル・ウイリアムソンとエスダイヤーによる「中国語訳聖書に訳注を挿入する必要と困難について」

であった。

この二つの報告によって、1881年に出版された英文「改正訳 (R・V)」と豊富な欄外注を付した形式が正面から取り上げられることになった。そして翻訳は「改正訳」にしたがうという基本方針が決められた。

旧約の場合、ヘブル語の本文は変わらず、解釈が問題になるが、「欽定訳」には誤訳や意味不明な部分があるので、「改正訳」にしたがうことは同じ原文の解釈上の問題にとどまった。

ところが新約の場合、「改正訳」にしたがうということはギリシャ語本文の5,000箇所にものぼる変更を意味していた。「改正訳」の出版は1881年5月17日のことである。それは二つの大学から初版が発売されたその日のうちに1万冊が売り切れてしまうというセンセーショナルな出来事だった。しかし長い間「欽定訳」に親しんで来た人々にとって「改正訳」の評判はあまりかんばしいものではなかった。旧約が読みやすくなったことはともかく、新約ががらりと変わってしまったのである。

1853年「代表訳」と「公認本文」

1853年の「代表訳」には翻訳の底本としてギリシャ語の「公認本文」を用いることが決められていた。宗教改革には民衆への聖書の開放という一面があるが、エラスムスによる新約のギリシャ語本文の刊行は、ルター訳や欽定訳の登場を準備するものだった。ルターは同時代人であるエラスムスのギリシャ語本文を用いたが、かなりの部分でまだラテン語のウルガタに依拠しているといわれている。キング・ジェームスの欽定訳（1611）はティンダルなどの前人のすぐれた業績やドイツ語のルター訳を参考にし、ギリシャ語の底本にはエラスムスの系統にあるベザのギリシャ語校訂本が用いられた。「公認本文」とはエラスムスにまでさかのぼり、「欽定訳」の底本となった校訂本を総称して呼ぶ名称である。その荷った歴史的な意義は高く、「欽定訳」とともに、ある教派では現在でも神聖視されている。私の手もとにあるのは1997年に Trinitarian Bible Society から出版されたベザの版で、表題は *H KAINH ΔΙΑΘΗΚΗ* というギリシャ語だが副題として *The Greek Text underlying The English Authorised version of 1611* としるされている。「欽定訳」が神聖視されれば「公認本文」も尊重され、「公認本文」の欠点が指摘されれば「欽定訳」の尊厳にかかわる。「欽定訳」と「公認本文」はそのような関係にあり、両者を互いに尊重するということは19世紀ではまだ常識的なことだった。「代表訳」でそれを底本とすることに何の抵抗もなかったのは当然である。

マーシュマンとグリースバッハ版

しかし「代表訳」以前のプロテスタントの翻訳でも必ずしも「公認本文」のみを用いたものばかりではなかった。ロバート・モリソンは清初のカトリック神父 Basset の中国語訳の手稿本の写しを用いていたが、モリソンがどのギリシャ語本文を用いたかは分からない。モリソンよりも少し早くインドのセランポールで翻訳を完成したマーシュマンとラサールは「公認本文」ではなくグリースバッハの校訂本を底本にしていた。グリースバッハ（Johann Jakob Griesbach 1745～1812）は本文学史上重要な人物であり、本文批評の15の「カノン」のうち第1のカノンは極めて有名である。「短い読み方は長い読み方に優先する。」彼はこのカノンによってルカ11章3～4節の主の祈りを確定した。グリースバッハの主要な版は1775～77（ハレ）、1796～1805（ハレとロン

ドン), 1803~7 (ライプチヒ) で刊行された。マーシュマンは航路はるか中国に向かうにあたって当時最も新しく、同時にまた、最も問題提起を多く含んでいたギリシャ語本文をたずさえて来たのである。中国が固く門戸を閉ざしている時代にマーシュマンはアモイ生まれで中国語についてはまったくのネイティブといってよいラサルという協力者を得て、インドのセランポールでグリースバッハ校訂本の翻訳につとめていた。後に「代表訳本」「ブリッジマン訳」に不満を感じたバプティストのゴッダードが参照にしたのがこの「セランポール版」と呼ばれるマーシュマン訳で、グリースバッハ校訂本の系統は中国ではけっして主流ではないが「和合本」の刊行までかなり長く一部で用いられていたことになる。

宣教師たちのテキスト

さらに彼らより一世代遅れた宣教師たちも「公認本文」以外の校訂本をたずさえて来ていた可能性が高い。

1890年の第2回宣教師大会当時60歳前後の人々から、その後輩たちの世代まで広く用いられていた教科書的なギリシャ語本文があった。1849年からたちまち7版を重ね、1万5,000部を突破したという廉価版であり、editio academica (学生版) とよばれた。このギリシャ語本文は後にシナイ写本を発見したティッシュENDORF (Tischendorf) の編で、多数の異本校合の成果をもち込んでいた。(イギリスでもトリゲネスも校訂本があらわれたが、どちらも「公認本文」から大きく離れている。)「公認本文」の弱点は明白であった。

エラスムスは当時バーゼル修道院にあった二つの12世紀の写本を用い、手もとにあったf1と呼ばれる古い型をとどめた写本を用いなかった。「欽定訳」の底本を提供したベザは福音書のすぐれた写本であるベザ写本(D)を所有していたが、これも用いることはしなかった。アレクサンドリア写本(A)も用いられず、パチカン写本(B)も参考にされていない。パチカン写本の公開は1890年で、参考にされなかったのはしかたないが、「公認本文」で用いられなかった古写本や教父の証言による本文の校訂が進み、「学生版」という最も廉価なスタイルで広く流布していたのである。そして1859年シナイ写本(N)が発見されると、ティッシュENDORFはその写本による校訂版を出版し、ケンブリッジ大学のウエストコットとホルトは他の古写本とシナイ写本との校訂を行い、その成果を「改正訳」に反映させていったのである。結局「公認本文」

とウエストコット＝ホルトの校訂本とでは5,000箇所相違が見られることになった。中でも、目立つところは、

① エラスムスの加筆の削除

「使徒行伝」9章5節～6節、「ヨハネ第1の手紙」5章7節

② グリースバツハの第1カノンによる短い読み方

「ルカによる福音書」11章3節～4節

「欽定訳」の崇拜者にとって「ヨハネ第1の手紙」5章7節の削除は「三位一体」の教理に対する攻撃としてうけとられたし、「ルカによる福音書」11章3節～4節の「主の祈り」の短い読み方は、幼い時から親しく唱えている「マタイによる福音書」の「主の祈り」との一致をはなはだしく損なうことになり、これらが一句たりともゆるがせにできない「神の啓示」であるという「逐語霊感説」をゆるがすことになってしまった。

神聖な「欽定訳」と「公認本文」を捨てて、このように冒瀆的な「改正訳」とその底本にしたがうことはとても出来ないと考えた人々がいたことは確かである。

1890年の宣教師会議で、翻訳は「改正訳」を基準にすると決定された時、数名の有能な宣教師が翻訳委員会から脱退していった。

「重訳」について

ところでこの時、翻訳委員会の内部で「翻訳は改正訳にしたがう」と決議されたことによって、「和合本」は英訳からの重訳にすぎないと批判されることになり、このような「重訳」説が今日まで通用している。しかし3,000名の宣教師の中から選ばれた翻訳委員会のメンバーは本国でならギリシャ語教師がとまるほどの人材であった。彼らが終生の事業である聖書の翻訳を英訳からの重訳で満足し得たとはとても考えられない。彼らには「原文に忠実」であることも要求されていた。原文とはいってもなくギリシャ語本文である。しかし、それでも翻訳は「改正訳」にしたがうと決められたのである。

実はそれは、訳文の混乱、そしてそこから生じる教派間の意見の対立を極力おさえようという配慮であった。英国内外聖書協会（British and foreign Bible Society）が翻訳の底本に「公認本文」を捨て「ネストレ3版」を用いるように指示したのは14年後の1904年のことである。1890年代にはそれぞれの特徴をもった複数のギリシャ語本文が刊行されていた。それらの複数の底

本によって翻訳を進めれば当然意見の対立が生じてくる。

「公認本文」はすでに時代遅れであり、新しい校訂本を用いるべきだと考える人もいれば、あくまで「欽定訳」と「公認本文」にこだわる人もいる。たとえ全員が「公認本文」を捨てて新しい校訂本を用いることに同意したとしても、数種、十数種の校訂本の間には一致しない本文がある。1890年の時点では主要な校訂本だけでも

ティッシェンドルフ

ウエストコット＝ホルト

ウェイマース (weymouth)

1890年以後、翻訳期間中には

ヴァイス (Weiß) 1894

ネストレ (Nestle) 1898

があらわれている。彼らと反対の立場をとる保守的なものでは

スキューヴナー

パーマー

の版が「改正訳」出版と同じ1881年に出版されている。それらはウエストコット＝ホルトの校訂が事実上「改正訳」にそのまま採用されていることに不服を感じ、校訂本の形をとりながらも実際には「公認本文」を再提出したものである。

これらの中からある一つを翻訳の底本に定めることは、学閥や教派内の人脈の関係もありさらに複雑な混乱を招くことにもなりかねない。そこでとくに特定のギリシャ語本文を指定することはせず、意見の対立が生じた場合には、すでにある「改正訳」に合致するものを選ぼうという取り決めが必要になったのである。

「改正訳」は事実上ウエストコット＝ホルトの校訂にもとづいているので、どのようなギリシャ語本文を用いたとしても、「改正訳」に合致する方向に進めてゆけば、結果としてウエストコット＝ホルトの本文を仮想せざるを得なくなってしまうのである。

なお現在広く用いられているネストレ26・27版 (NESTL-ALAND NOVUM TESTAMENTUM GRAECE. 26 neu bearbeitete auflage. 27. revidierte Auflage) には巻末にウエストコット＝ホルトなどの本文との異同が示されている。そしてもしも十分に合理的な根拠がある場合には、それらの異文を再び採用する可能性のあることを暗示している。

第2章

この新しい新約聖書は1904年に「浅文理」が完成し、1906年に「文理」が完成した。国語訳はやや遅れて1907年に完成したが、この年はちょうどプロテスタント中国宣教100周年にあたり、この国語訳和合本新約聖書の出版には記念碑的意味があった。

ルカによる主の祈り

ところで「和合本」の翻訳が決議されたこの宣教会議の初日に、ヘンリー・ブローデットの祈りの後で、ハドソン・テラーが宣教師派遣について力説したことをのべた。「和合本」には上述のような底本をめぐる問題の他に、宣教の必要に応える翻訳でなければならないという課題があった。しかし、翻訳の学問的な正確さと宣教の必要に応えることとは細部で矛盾し合うことがあった。そのような場合に役に立ったのが豊富な訳注である。聖書には訳注のあるものと無いものがあり、教会で用いられるもの、例えば日本聖書教会の口語訳や新共同訳には訳注が無い。一方フランシスコ会の聖書などには豊富な訳注がある。あるいは必要に応じて厳選された訳注のみを付けているもの、例えば文語訳（大正訳）などもある。英訳でも「欽定訳」には訳注が無いが、「改正訳」は豊富な訳注を付けている。（「改正訳」には訳注つきのものと、後に訳注をすべて省略してしまったものがある。）

「和合本」も割に豊富な訳注をつけている。これは「改正訳」にならったものであろうが、「改正訳」の訳注をそのまま引き移してきたものではない。

この会議でドクトル・ウィリアムソンとエス・ダイヤーは「中国語訳聖書に訳注を挿入する必要と困難」という報告を行ったが、この件をめぐる賛否両論あってなかなか決着を見なかった。「和合本」の訳注で特徴的なことは、異文資料に関しては、

- ① 伝統的な本文を混乱させるような「改正訳」の訳注は用いない。
 (例)「マルコによる福音書」1章1節
 「ヨハネによる福音書」7章53節
- ② 場合によっては「公認本文」と「欽定訳」を優先させる。
 (例)「ルカによる福音書」11章2節～4節

この「ルカによる短い主の祈り」はグリースバツハから採用され、1890年にバチカン写本が公開されてその確証を得てからは、ほとんど疑いをはさむ余地がないが、「和合本」では「公認本文」と「欽定訳」のマタイに近い読み方を本文にしている。

A: 新しく校訂された本文

- 2 *πάτερ, ἀγιασθήτω τὸ ὄνομά σου, ἐλθέτω ἡ βασιλεία σου.*
 3 *τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν ἐπίουσιον δίδου ἡμῖν τὸ καθ' ἡμέραν.*
 4 *καὶ ἄφες ἡμῖν τὰς ἁμαρτίας ἡμῶν.*
καὶ γὰρ αὐτοὶ ἀφιομεν παντὶ οφείλοντι ἡμῖν.
καὶ μὴ εἰσενεγκῆς ἡμᾶς εἰς πειρασμον.

(ネストレ 27 版)

B: 「改正訳」の本文

⁽⁵⁾Father, Hallowed be thy name

Thy kingdom come⁽⁶⁾

Give us day by day⁽⁷⁾ our daily bread and forgive us our sins for we ourselves also forgive everyone that is indelbted to us

And bring us not into temptation⁽⁸⁾.

《訳注》

- (5) Many ancient authorities read "Our Father which art in heaven" see Matt vi 9
 (6) Many ancient authorities read "Thy will be done.as in heaven so on earth" see Matt vi 10
 (7) Gr. our bread for the coming day
 (8) Many ancient authorities add "but deliver us from the evil one (or. from evil)"

「改正訳」は短い読みを採用し、訳注の(5)(6)(8)で「公認本文」と「欽定訳」の長い読み方を「異文」として提示している。

次に「和合本」であるが、ここでは逆に長い読み方が本文として示され、短い読み方が訳注で示されている。

我們在天上的父（有古卷只作“父阿”）

願人都尊你的名為聖，願你的國降臨，願你的旨意行在地上如同行在天上（有古卷無“願你的旨意”云云）我們日用的飲食天天賜給我們。赦免我們的罪，因

為我們也赦免凡亏欠我們的人。不叫我們遇見試探，救我們脫離凶惡（有古卷無末句）

本文はマタイに近い長い読み方だが（ ）の訳注にしたがって読み直すと、グリースバッハ、ウエストコット＝ホルト、そして今日のネストレにつながる短い読み方があらわれてくるのである。なぜこのような方法を取ったかといえは、やはり「欽定訳」を尊重し、「霊感説」を取る正統的な人々に対する配慮からであろう。聖書の本文をめぐる信仰に関わるような分裂が生じることは、宣教にとって大きなマイナスになるからである。

良い羊飼

もう一つ「和合本」の訳注で特徴的なことは、「伝道」的なコメントである。次の二つの例はギリシャ語本文の欄外注にも、「改正訳」の訳注にも無い「和合本」独自のものである。

① 本文に対する注釈

「ヨハネによる福音書」10章10節

A. ギリシャ語本文

ἐγὼ ἤλθον ἵνα ζωὴν ἔχωσιν καὶ περισσοὺν ἔχωσιν

B. 改正訳

I came that they may have life

「改正訳」が「欽定訳」と異なるところは、欽定訳の

I am come

が I came

になっているだけである。これはギリシャ語の“ἤλθον”というアオリストを完了ではなくて過去に訳し直すという「改正訳」全体にみられる改訳の方針である。それがコイネーのアオリストの用法と確実に一致するかはともかく、アオリストをどう訳すかは「改正訳」が最も苦心した点であると言われる。ただし「欽定訳」にしる「改正訳」にしるいわゆる「古典文法」にしたがっており、問題は「時制」の対応であった。今日よく言われる「アクティオン・ザルト」は1885年にブルクマン（Burgmann）によって新約会で唱えられ、モールトンの「プロレゴメナ」によって英語圏に紹介されたものである。なお今日の

「談話分析」によればギリシャ語のアオリストは弱く、次につづく完了や現在時称に重みがかかると言われる。

「和合本」は

我来了，是要叫羊（或作人）得生命
並且得得更丰盛

すばらしく韻律的に訳されており，このまま曲をつけた歌が'70年代にあった。問題は「羊に」の次に「或いは人とする」という訳注があることである。

ギリシャ語の *ἐχθρῶν* には主語が無いので英訳では“they”を補い，日本語や漢訳では本文の直前の定冠詞付きの *τα πρόβατα*（羊たち）を *ἐχθρῶν* の主語にしている。ところがそれが「人に」とも訳せるということはどこにも無いのである。これはこの「良い羊飼ひ」のたとえをキリストの贖罪としてとられる積義を訳注にもち込んだ結果である。

このように積義を訳注にもち込むことには節制が必要であるが，「和合本」にはけっして多くはないがこのような訳注がある。これもまず宣教を念頭に置いた翻訳姿勢の一つとして理解することができる。

シニムの国

② 宣教上有益な仮説

次の例は，ただ宣教上の必要が本文を決定してしまった極めて興味深い箇所である。

旧約のイザヤ書 49 章 12 節

A. 「改正訳」

Lo, these shall come from far: and; lo these from the north and from the west ; and these from the land of Sinim.

これはやがて全世界が神のもとに集うことを描いた雄大で美しいイザヤの預言の一節である。

B. 「和合本」

看哪，這些從遠方來，這些從北方從西方來，這些從秦國來（“秦”原文作“希尼”）

1843年、南京条約によって5港が開港されると、長年の夢であった宣教師の中国本土滞在が実現した。(ここまで何も触れずに来たが不平等条約に宣教師の滞在や行動の自由がもられているのは「帝国主義の走狗」という面もあるが、実は帝国主義が本国の民衆、圧倒的多数のキリスト教徒たちを納得させるという要素がかなり強かったように思われる。)このような情勢を反映して書かれた本がある。ロウリー(Walter Macor Lowrie)の“The Land of Sinim(シニムの国)”という本である。ロウリーはイザヤ書49章12節の“Sinim”という、今でも定説の無い地名が中国を指していることを数々の証拠を挙げて明らかにしようとした。一方中国人の中にも聖書が全能の神のことばであるなら、中国のことが書かれていないのはおかしいという声があった。「シニム」の国は宣教師たちに中国に対する大きなビジョンを抱かせると同時に、中国人に聖書にはたしかに中国のことがしるされていることを示すことになった。中国も最後には神のもとに集うのであるというメッセージがイザヤ書の中に示されているのである。「和合本」では宣教師と中国人の双方の期待に応える「秦」を本文に採用し、原文の「シニム(希尼)」を訳注にまわしている。この箇所は説教者によってしばしば語られ、宋尚節のノートにも「秦、中国也」として示されている。

ところでこの「シニム」の訳語についても一つ興味深い例がある。それは旧約のギリシャ語訳「セプチュアギンタ(七十人訳)」である。

*ἰδοὺ οὗτοι πόρρωθεν ἔρχονται
οὗτοι ἀπο βορρα
οὗτοι ἀπο θαλασσης
ἄλλοι δὲ ἐκ γῆς περσῶν*

見よ 彼らは遠くから来る
彼らは北から
彼らは海から
また他の人々は [・]ペ[・]ル[・]シ[・]ャ[・]の[・]地[・]から (来る。)

どこか地中海を感じさせるが、シニムを秦と訳した人と、ペルシャと訳した人とどこか共通する祈りがあったような気がする。

「和合本」の欠点

最後に「和合本」口語訳の中国語について留意すべき点をいくつかのべてみる。私が初めてこの「和合本」を読んだのは1970年代の初めで、当時は台湾や香港で出版された旧体字（繁体字）の縦書きのものだった。日本の聖書と同じような黒い厚い表紙のものだが、たいていそこには英文で“shanti”とか“shen”とか小さく表示されていた。“shanti”とは日本語で「神」と訳されている“ὁ θεός”を「上帝」と訳した版で、“shen”とはそれを「神」と訳している版のことである。一般にイギリス系は「上帝」を用い、アメリカ系は「神」を用いているが、中国語では神さまの訳語が一定しておらず、「和合本」も二種類の版を出さなければならなかったのである。「代表訳」の時から現在まで未解決の問題で「上帝」に対してブリッジマンが「神」を用いた改訳を行い、それが日本の聖書に影響を与えたことは注目すべきである。なおドイツのファーベルは日本でもよく読まれた「馬可伝講義」の中で「上帝」を用い、同時にめんみつな考証を行っている。

今日では簡体字横組みの版がいく種類も刊行されているが、それらにはほとんどすべて「神」が用いられている。これは宣教の荷い手がほとんどアメリカ系であることによっている。

ただ、翻訳にあたってはじめは「上帝」が統一して用いられ、後にそれを機械的に「神」で置きかえたために、「神」で読むと翻訳のリズムがだいなしになってしまう箇所がかなりある。

（例）「創世記」1章1節

起初上帝創造天地

「ヨハネによる福音書」1章1節

太初有道，道与上帝同在。

これはもうほとんど韻文に近い。二音節ごとに小さな意味上の音読上の区切りがあって安定したリズムになっている。このリズムは「和合本」では「伝道の書」や預言書などによく使われているもので、詩経とか六朝の賦などの古典から現代のやや文章語的な表現にまで見られる。ところが一音節の「神」では完全にリズムがくずれてしまうのである。このような箇所は音読の際には「上帝」を用いたほうがふさわしい。

次に留意すべき点は、「的」の省略と「之」による代用である。おそらくある格調を意識してのことであろうが、不自然である。すべてそうになっているわけではないが、

已^レ睡^ル的^ノ聖徒

とすべきところが

已^レ睡^ル聖徒

と「的」が省略されている箇所が「マタイによる福音書」だけでも9箇所ある。

また那^レ売^ル我^ノ人

とすべきところが

那^レ売^ル我^ノ之^ノ人

と、「的」を「之」に替えて不自然になってしまった箇所は、同じく「マタイによる福音書」だけで6箇所ある。

なお「上帝」を「神」に替え、しかも「的」を省略したためにとんでもないことになってしまった箇所がある。「ヘブル人への手紙」11章3節である。

我^レ們^ノ因^テ着^キ信^ム、就^チ知^ル道^ノ諸^ノ世界^ノ是^レ

借^リ「上帝^ノ話[」]造^ス成^ス的^ノ

今日^ノご^ク普^通の「和^合本[」]では

借^リ「神^ノ話[」]造^ス成^ス的^ノ

になってしまっている。

すでに1950年代到北京の王明道が以上をすみやかに修正するようにうたえているが、なぜか今日でも修正されていない。

「和合本」に用いられている口語は今日では少し古めかしくなってしまったという意見がある。しかし、中国では'70年代の「現代中文訳」を採用する方向にではなく、「和合本」の修正版を出す方向に動いている。

「和合本」の白話文体的魅力

1890年の会議の時にはすでにメドハーストの口語訳もあり、ウィリアム・マーティンらによる北京官話訳もあった。しかし、一方は「南京官話」にかたよりすぎ、一方は「北京官話」にかたよりすぎると思われた。ヘンリー・ブロー

ジット、シェレシェウスキー、マティーアらこの会議の中心にいた人々は「北京官話」の訳に傾倒していたが、「和合本」の口語は北方でも南方でも違和感なく受け入れられるものでなければならなかった。

数年前に「小五義」という武俠小説を読んでいたとき、その中のある登場人物が

人為朋友捨命……（兄弟分のために死ぬってのは……）

と、語っている場面に出会った。この小説にはこの手の男だての台詞が多いのだが、ふと思いついたのは「ヨハネによる福音書」の一節である。

人為朋友捨命（人的愛心沒有比這个大的）

「小五義」と「ヨハネによる福音書」が全く同じ言い方をしているのである。「小五義」は1890年に刊行された。第2回宣教師大会の年である。

この部分の原文といくつかの中国語訳を時代順に並べてみる。

(μείζονα ταύτης αγαπην ουδεις έχει)

ἵνα τις την ψυχην αυτού θῆῃ ὑπερ τῶν φίλων αυτού

ブリッチマン 人為其友而捐己命

この訳が最も原文に近い。ちなみに文語訳の「人[・]その[・]友のために己[・]の[・]生命^{のち}を棄つる」はこの訳の書き下し文と同じである。

和合本 人為朋友捨命

現代中文訳（1976）

一个人為朋友犧牲自己的性命

この訳はTEVへの依存が強すぎる。

ギリシャ語には「其の」とか「己の」とかに訳される「αὐτου」が二回使われており、ブリッチマンは実に律儀に訳している。現代中文訳は一度、「和合本」はまったく意に介していないように一つも訳していない。しかし言わんとすることは中国語でも日本語でも「αυτου」を用いなくても通じるし、むしろそのほうが自然である。「和合本」の訳は当時のその筋の男だての言葉と同じである。口語というよりは「白話」なのである。

ところで、ここにもう一冊 1975 年に訳された「当代福音」という新約聖書がある。信徒ではなくて、初めてキリスト教に触れる一般読者を対象にした、自然に受け入れられる分かりやすさを目指したものである。この聖書ではこの箇所はこう訳されている。

為朋友捨命（可説是人間最偉大的愛了）

「和合本」と同じ訳である。

後 記

5 年前、放送大学のスクーリングで弦巻教会の金子一三氏から中国語の聖書を読みたいのだがどうしたらよいかと尋ねられたことがあった。私は CLC（御茶の水学生基督教会館内）の洋書部で入手できる併音（ローマ字表記）付の新約全書（和合本）をおすすめし数章を録音してさしあげた。その時、この聖書について解題のようなものを書く約束をしたのだが、分からないことが多すぎて、手つかずになってしまっていた。

そんなある夏の日、引っ越しのたびに移動し「開かず」になっているダンボール箱の中からギリシャ語の新約（ネストレ 25 版）と数冊の文法書とポケット版の希英辞典が出て来た。学部時代に荒井献先生から手ほどきを受けて座礁してしまったまま 20 年以上もダンボールに眠っていたのである。それが「水滸伝」や「三侠五義」といっしょに眠っている姿は奇妙であった。私はとにかくそれらのギリシャ語聖書関係の「出土品」をもう一度初めから読み直し、少なくとも新約の原文だけは読みこなせるようにしようという一大決心をした。そうしているうちに 5 年がたってしまい、ようやく不十分ながら小さな論文をまとめることができた。資料として挙げることはできなかったが、北京のキリスト者の若い友人たち、その中には親類にあたる夫婦もいるが、彼らから聞いたこの聖書の感想などは有益であった。またある十代の青年が「和合本は清朝のことばだ」と言っていたことも印象的である。なお、横浜華僑教会ではこの「和合本」を用いての礼拝や「兄弟会」にしばしば参加することができ、この聖書のことばがなおも本国や海外の教会で生きていることを実感した。なお現在中国大陸ではインターネットで聖書の全文が読めるが、そこに用いられているのもこの 1907 年以後の「和合本」である。

《主要参考資料》

(中国キリスト教史)

- 「中国基督教史」楊富森 台湾商務印書館 1972 2版
「基督教与中国近代化論集」林治平 台湾商務印書館 1970
「聖經鑑賞」卓新平 中国社会科学出版社 1992
「基督教千問」楽峰 文庸 紅旗出版社 1995
「日本キリスト教史論」第1部 石原謙 新教出版社 1967
「歐米人の支那に於ける文化事業」山口昇 上海・日本堂 1922

(新約本文学)

- 「新約本文学史」蛭沼寿雄 山本書店 1987
「新約聖書の本文研究」ブルース・M・メッツガー 橋本滋男訳 聖文舎 1973
「英訳聖書の歴史」永島大典 研究社出版 1988
“The Story of the Bible” Sir Frederic Kenyon 1973

(公認本文)

“H KAINH ΔΙΑΘΗΚΗ” The TRINITARIAN BIBLE SOCIETY 1997

(ネストレ版)

NOVUM TESTAMENTUM GRAECE 25, 26, 27 Auflage
EIN FÜHRUNG 26 Auflage

「ネストレ=アエラント ギリシャ語新約聖書(第26版)序文」橋本滋男・津村春
英訳 日本聖書翻訳研究会 1991

(七十人訳)

“Septuaginta” (H ΠΑΛΑΙΑ ΔΙΑΘΗΚΗ) Deutsche Bibelgesellschaft 1979

(ギリシャ語動詞についての議論の歴史)

- 「ギリシャ語新約聖書の語法」スタンリー・E・ポーター 伊藤明生訳 ナザレ企画
1998
「談談漢文聖經訳本中的『的』字」王明道(「靈食拾遺」) 香港晨星出版社復刻 1987

(中国語／中国文学・社会学部兼任講師)